農林水産政策審議会　第２回総会　議事要旨

Ⅰ　**開催日時**　令和７年１月 30 日（木）15:00～17:30

Ⅱ　**場所**　兵庫県立のじぎく会館大ホール

Ⅲ　**出席者**

１　**委員**

相田　欽司　仮屋漁業協同組合 代表理事組合長
井藤　絵美　チームしんすけ農場
大山　憲二　神戸大学大学院農学研究科 教授
小田　滋晃　京都大学 名誉教授
衣笠　智子　神戸大学大学院経済学研究科 教授
田沼　政男　兵庫県漁業協同組合連合会　代表理事会長
辻村　英之　京都大学大学院農学研究科 教授
都藤　元彦　株式会社都藤商店　専務取締役
中塚　雅也　神戸大学大学院農学研究科 教授
中山　晋吾　兵庫県農業経営士会 会長
野村　俊彰　兵庫県木材業協同組合連合会　会長
長谷川尚史　京都大学フィールド科学教育研究センター 准教授
福本　博之　兵庫県農業協同組合中央会　代表理事会長
藤井　洋一　株式会社神戸新聞社　論説副委員長
渕上由美子　兵庫県女性農漁業士会　会長
船越　照平　一般社団法人兵庫県食品産業協会 会長
坊垣　昌明　兵庫県土地改良事業団体連合会　副会長理事
堀　　豊　　吉備国際大学農学部　教授
松波　知宏　株式会社ワールド・ワン 取締役
皆川　芳嗣　株式会社農林中金総合研究所 理事長
八木　隆博　兵庫県農業法人協会 会長
安福武之助　株式会社神戸酒心館 代表取締役社長
米井　丈人　ひょうご卸売市場協働ネットワーク協議会　副会長

２　**県**

守本農林水産部部長、呉田農林水産部次長、菅村農林水産部次長
ほか県農林水産部、環境部職員

Ⅳ　議事次第

１　開会

２　あいさつ

３　委員の辞任及び委嘱について

４　議事

(1)農林水産企画部会での審議について

(2)新ビジョン骨格案について

（各委員から意見聴取（別紙「主な意見」参照））

５　その他

６　閉会

（別紙）

主な意見

委員

アンケートの結果を見たが、このとおりだと思っている。今、農業で一番しんどい状況と言われているのが畜産業。ウクライナ戦争等があり、資材高騰の煽りを受けている。酪農はアンケートにあるとおり、ブランド化ができていない。我々牧場は近畿生乳販売農業協同組合連合会とメーカーとの乳価交渉で決めた単価で販売する。昨年乳価が上がって経営が楽になったのではないかと思われるが、黒字経営ができている経営体が殆どない。経費を抑えることができず、先行きが暗い情勢。畜産と言えば神戸牛、但馬牛のイメージが強いが、酪農についても大事に考えていただきたい。酪農家もホルスタインを使って但馬牛の繁殖をしており、畜産業界の中で助け合いをしながら発展させていこうと考えている。ぜひビジョンで畜産の明るい未来が書けたらと思っている。

委員

同様の課題は各方面で沢山あると思うが、我々も豊かな海を目指して、下水道の管理運転によって窒素を増やす取組や、海底耕耘、かいぼり、森づくりなどに取り組んできた。栄養塩が戻って、しっかりと魚を育める海を目指して活動している。また、ファンづくりにつながる活動として、30 年以上前から小学生を対象とした魚食教室をやってきた。近年、東京の企業が淡路島に移転し、魚を触ったことのない子どもも増えたことから、タッチプールも行った。このような体験をすることによって、浜で水揚げされる魚や旬の魚を知ってもらうことができ、魚のファン創り・ブランド化につながると思ってやっている。仮屋漁協も小規模だがノリ養殖も行っている。近年、兵庫県が生産量日本一になったが、量的には明るい未来とは言えない。温暖化に伴って漁期が狭くなりつつあるので、生産性を上げられるノリ種苗の生産を早くしていただけたらと感じている。ビジョンでは、種苗の生産等の見直しについても書いていただきたい。

委員

他の委員からも話が出たとおり神戸ビーフが高値で推移していることはいいことだが、様々な問題も抱えている。19 ページの「農林水産ビジョン 2035 のめざす姿」（２）で牛群改良の話が出てくるが、これは温暖化対策の話だったと思う。その視点でいうと牛だけでいいのか、養豚、養鶏のことも考えておく必要があるのではないかと感じた。同じく、温暖化等気候変動への対応という点では、昨今、畜産業が温室効果ガスの面でマイナス要因扱いされている中、温暖化抑制につながる取組も必要。研究の中でも実際に動き始めているところなので、抑制という言葉が入っていてもいいと思う。

委員

アンケートなどに基づいて非常に良くまとめ上げられ、様々な方向からビジョンが作成されていると思う。農業者の中にはやめようと思っている方もいら

っしゃると思う。そういった方の声を取り上げる工夫も今後必要なのではないかと感じた。中でも、後継者や農地集積の問題が非常に深刻だと感じた。資料３の19ページでも担い手への農地集積などの重要なポイントが整理されているが、国土の保全がどうなされるかという観点や、中山間地がどうなっていくかなどの視点も少し入れるといいのではないかと思った。環境保全型農業や有機農業は日本で普及していないが、消費者にも普及させる視点が重要だと感じた。また、県民への安定的な食料供給という点では、貧困者や所得格差の問題、フードバンクの充実化など、食に困っている人をなくすという視点を強調することが重要ではないかと感じた。

委員

今、事業者が一番困っているのは栄養塩。以前、設定方法を改正いただいたが、リン・窒素はその当時年間38ｔくらいしか出ておらず、今で45～46ｔくらいになっているが、本来我々としては80ｔくらいほしい。魚のえさがないからイカナゴが獲れない。我々漁師は一生懸命かいぼりや栄養塩管理をやっているが、それだけでは原因が掴めない。エビ、ゴカイ、アナゴも消えていっている。魚は骨があると言って魚離れも進んでいる。魚は高いというが、漁師は命をかけて仕事をしている。安く提供したくても魚がおらず、漁師は減っている。イカナゴは去年は１日で漁期が終わった。それだけ資源管理をしてもなかなか増えてこないのが実態なので、原因を調べていただきたい。リン、窒素だけではここまで減ると思えないので、他にも原因があると思う。

委員

企画部会において、農林水産業すべてにおいて儲かる産業にする点はお話させていただいた。川上の林業は危険を伴う仕事。実作業に従事する林業の担い手を守らないと、当該地域だけではなく下流域まで、多くの住民を土砂崩れや河川氾濫などの危険に晒すことになる。命を守るという観点でいうと、それに見合う対価がなければ仕事は続けられない。真っすぐできれいな、住宅向けになる木は単価がいいが、それ以外はなかなかお金にならず、バイオマス等での使い方が多い。建築材として使えれば炭素ストックという意味で有意義だが、多くは燃やさざるをえない。我々材木屋としては川上の林業の違う守り方もあるのではと感じる。儲かる産業にするためには、産業資材やコンパネなどの非建築分野での活用が重要。具体的には土木現場での土留めの板使い、枠使いや、工場で製造した機械の梱包材等、近年、素材を樹脂や金属から木に戻す流れがある。木の値段が下がっていること、加工がしやすいことが大きな要因。兵庫県は本邦有数の工業地域で、下請けも含めて裾野が広い。一見、山と遠い臨海部の工業地域等であっても、木が使われることで遠い誰かの命を守ることになることを広報し共有していきたい。

委員

先週、東京で開催された全国指導農業士会へ行った。そこでも事業継承と人の確保が一番の悩みの種。昨年は米不足でお米が高いと言われているが、生産者からすると肥料なども全て上がっているので、農業者の大きな儲けには繋がって

いない。バトンタッチしようと思ったら儲かる産業にしていかなくてはいけない。淡路で実施した現地調査でも聞いたが、他産業に人材が取られている。一番の課題は人材確保だと感じている。

委員

兵庫県は県土の 68%が森林。林業には川上と川下があり、川下では全国的に木材の活用が盛り上がってきている。そんな中で、学校関係についてはできるだけ木材を使っていこうという中で活用事例が多々ある。子どもに木材に触れてもらい、馴染んでいく、一緒に育てていく、共感をもってもらうということが課題。県木連の関係団体が 23 団体あるが、その中で学校のテーブルを入学時に支給して６年間使ってもらうという事例がある。また、灘五郷とコラボとして木のお猪口を作り、酒盛りプロジェクトとして東京の木工コレクションに展示された事例もある。木育を業界としてももっと広げていきたい。

委員

人手不足、担い手不足が共通認識だと思う。23 ページの「農林水産ビジョン 2035 の施策体系」でも農業林業水産業それぞれのところに人材育成が盛り込まれているが、兵庫県の農林水産業にとって次の担い手を確保することが最重要課題だということを、最初にどこかで強調する形にして、兵庫県としての重要性をアピールするやり方があるのではないかと思った。また、儲かる産業にするという点ではブランド化を進めることが重要だが、今後兵庫県からブランドが出てきた時に、品種の流出や偽物が出てくる可能性を認識しておくべき。シャインマスカットのように海外に流出している事例もあるので、そういったブランドを兵庫県で知的財産として守っていくことも記載すべきではないか。

委員

今回のビジョンでは「持続可能な農林水産業の実現」が重要。儲かる産業にしないと人材も確保できないし、持続的な産業にならない。最近、米が取り合いになっているが、商系とＪＡで取り合っている。淡路のタマネギも同様で、毎日値段が変わって高い方へ流れていく。タマネギは儲かっていると聞くが、米はそこまでに至っていない。競争の原理が出ないと、価格が高まらない。原価もどんどん上がっている。我々食品産業協会のメンバーは、加工業が多いが、食材費から人件費まですべてが上がっている。そのまま価格転嫁しても量販店に扱ってもらえない。儲かる産業にしていかなくては、産業も環境も持続できない。そのために、皆さんと今後も議論してきたい。

委員

基盤整備の中で防災、減災対策として老朽化したため池の整備が必要という課題を我々は認識している。兵庫県は全国一ため池が多いので、いくらやってもなかなか追い付かないところがあって、計画的に進めていただいていることは認識しているが、課題としてはある。
23 ページの中で「地域・担い手のニーズに応じた農地整備」ということで書いていただき、括弧書きで「大区画化などの農地整備」とあるが、パイプライン化

というのも非常に重要なキーワード。パイプライン化によって用水管理のコストを下げることが農業生産コストを下げるのに非常に大きなウェートを占める部分もある。水利施設の長寿命化ももちろん重要だが、そういった点も入れていただきたい。全体としては、儲かる農業について他の委員からも多々出てきたが、買い支える消費者への意識醸成をもっと力を入れていかないといけないと感じた。

委員

現地調査で感じたのは、水がつなぐ農畜林水。23ページの「（６）食の安全を支える生産体制」の「①適正な生産・監視体制の推進」に「農薬適正使用」という言葉が出てくるが、良いものも悪いものもすべて水を通じて海に行きつくという視点が大事。農薬は気を付けて使っていただきたいし、窒素やリンが不足しているなら肥料の使用も大いに結構。海はすべてのものを受け入れる。色々な面で海が最終処理場になっているので、その点にも心を寄せていただきたい。

委員

気になるところは全体的に網羅されているので、加えていただきたい点は特にない。「次代につなぐ環境と調和のとれたひょうご五国の農林水産業・農山漁村の実現」というところもまさにそのとおりだと思う。魚が取れなくなったという話や、黒大豆の規格外品と正規品の割合が入れ替わり、7割が規格外品になったという話を聞く。我々１事業者でできることは限られているので、そういった課題を兵庫県で吸い上げていただき、今ある仕組みの中でどう課題を解決していくのか、逆手にとってブランド化していくのか。戦略の部分では異論はないので、戦術の部分で盛り上げていけたらと感じた。

委員

兵庫県庁で一緒に働いていたＯＢと話すと、農村の現状を見て土地利用型農家の経営継承ができていくかどうか、耕作放棄地が出てこないかどうかをかなり心配されている。地域計画に落とし込まれ、農地集積でき、経営が発展している形を目指さなければいけない。ビジョンの目標を達成するための具体的な施策をどうするかが一番重要だと思う。国会で議論されている合理的な価格形成のための新法律や土地改良法の改正だけでなく、水田活用方策も変わると言われている。国の動きも見て使えるものは使っていく。その上でさらに兵庫県で重点化するところ、目立つところが何カ所かないと、兵庫らしさが出てこない。有機農業を重視して書かれているが、そういったことに合わせて県独自でやるような施策、突出したものも書いてはどうか。林業、水産業についても同様に、県独自の政策をしっかり書いたらいいと思う。例えば、兵庫県で新たに日本農業遺産が認定されたが、そういった目立って使えるものは使っていくことを考えていただきたい。県庁の建て替えで木材利用が一段と進むといったようなことも盛り込んでいいと思う。静岡県浜松市では園芸農業が盛んで、「ユニバーサル農業」と言って、農業側から福祉側に接近している。理由は人手不足。農業を支えるサービス事業体のことが書いてあるが、労働力の視点で、農業がユニバーサル

化して多様な人たちが入っていくということも、農業の持続可能性を上げていく政策に位置付けていただきたい。来年に向けて、企画部会でのご検討をお願いしたい。

委員

一番思ったことは、アンケートの「【問１】地域において新規就農者・将来の農業経営体は十分確保されている」に対して、「そう思う」という回答が２％しかない。これは緊急的な課題。自社でも 100 年企業を目指そうというビジョンを作った。その中で、30 年経ったとき、野菜が原体で売れるかどうかという話になった。今でもキャベツを一玉で買う人はいないし、パートさんにも自分の４歳の子供が将来、料理をするか？と聞くと、しないと言う。これまでの 100 年で農業は機械が進歩し、効率的になってきたと思うが、これからの 100 年は農業者も何か工夫をしなければいけない。飲食店や加工など、二次産業に踏み込む必要があるかもしれない。でも農業は県民の食を支えていくという点が一番重要。将来の担い手として、新規就農者と法人は課題も違うと思うので、別々のものとして考えてもらいたい。17 ページに「多様な人材の確保・育成」とあるが、半農半Ｘは販売よりもライフスタイルの話なので、ここにあるのは違和感がある。23 ページの（１）の「③次代を担う経営力の高い担い手の確保・育成」も、もう少し分野を絞って考えた方がいいのではないか。農業は自分で作ったものを自分で売るだけでなく、データ活用など様々なスキルが必要。担い手育成のところをもっと重点化させ、特に農業法人のところをもう少し強化した形で取り入れていただけたらありがたい。

委員

日本酒は兵庫県を代表する重要な産業。高品質な酒米を安定的かつ、継続的に調達するということは必要不可欠。酒造好適米は主食用米より高価格で取引されているが、全国の一部品種では価格逆転現象が発生している。これでは酒米生産を継続できなくなるとおそれている。さらに、新規就農者の確保、労働力不足、気候変動への対応など、酒米生産を取り巻く課題は多岐にわたっている。灘五郷の多くの蔵元は特別契約で山田錦を栽培する村米制度を採用しているが、この強固な協力関係を築いて高品質な酒米の安定供給と持続可能な農業の推進、サプライチェーンに取り組む必要があるというふうに認識している。多くの地域で酒米が高騰していることから、多くの酒蔵で４月または 10 月に日本酒の値上げを予定。しかし価格上昇による売り上げの減少が懸念されるため、兵庫県には酒米の値上げ分を補填するなどを、兵庫県酒造連合組合からもお願いしたい。サスティナブル経営においては、環境価値と経済価値を両立することが重要。今回のビジョン見直しにおいては、環境と調和のとれた農林水産業の確立という環境価値、また、経営が成り立つ儲かる農林水産業の実現という経済価値の向上がある。経済価値の向上という観点において、ブランド化は農産物や水産物の価値を高めるための有効な手段であると思う。理解醸成においてはブランドの魅力を高めるためのストーリーや、消費者の信頼を得るための認証制度、地元の企業やコミュニティーとの連携などで、地域全体のブランド力を向上させることも

できると思う。ＳＮＳやウェブサイトを活用したデジタルマーケティングも、考慮していただけると幸い。

委員

非常にまとまったビジョンになっていると思う。神戸市内、兵庫県下の生産者やＪＡと話すことが多いが、後継者がおらず、高齢化が進んでいる。他府県も同様の状況。娘、息子に継承を進めることができないと言われる。農業をやっていても十分な利益が出てこない。就農するとしても、ハウス１棟 2～3000 万円すると言われている。将来を見据えて、新規就農者を増やすためには、補助金などの施策を講じていただかないと難しいと思う。野菜高騰がマスコミで報道されているが、夏場の高温の影響で秀品率が下がり、出荷が減ったためこの値段になっている。消費者に向けた報道になっていることは分かるが、単純に種をまいてものができているわけでなく、資材高騰や炎天下の中で農作業がしづらいということを兵庫県から消費者に向けて理解してもらうように発信・広報活動などの施策を講じてほしい。消費者が単に価格が高いだけの報道に惑わされることなく、何故高くなっているかの理解を得られるような報道がなされるようにお願いしたい。また、ほ場でのフードロスの話がよく出ているが、ほ場から出荷しても赤字になるから出荷しないことが報道されていない。消費者に対する教育ができないか、しっかり考えていただきたい。我々流通業者にも人材が集まらない。そういった面でも農業関係の人材育成、教育にも県としてご尽力いただければありがたい。

委員

夏の暑さが影響して、育苗中のイチゴの花芽が遅れて収量が落ちるなどの影響が出ている。苗代、土代、肥料や農薬代、人件費、ヒートポンプの電気代、灯油代等の燃料費、資材費も、全てが高騰しているが、販売価格はそこまで上げられないのが実情。仲間内でも暑さで白菜が巻かず、美味しく食べられるものも商品価値がなくなり出荷しても赤字になるのでそのまま土に戻すなどの事例も聞く。お金、労力、時間もかけて育ててきたものが廃棄になってしまう悪循環が生まれてほしくないので、消費者サイドだけでなく消費者に届くまでの販売流通する側にも理解と協力を得られるとありがたい。企画部会では 10 年先の農業の担い手育成（食育、農育）の話が出たが、姫路は給食で使う野菜は市場から買い取りになっている。市場の出荷規格が販売のネックになるので、もう少し柔軟に地元野菜を受け入れてもらえるようになるといいと感じている。

委員

人材確保が重要な課題だと感じている。他の委員からもご指摘があったとおり、林業は危険な仕事で、労災保険料が農業の４倍の水準。今年は全国的に林業大学校の志望者が半減している。要因は分からないが、一次産業という産業が若者から選ばれ、尊敬、感謝される職業になるための方策があればいいと思う。そういう意味では他の委員が指摘された木育、林業教育、食育に期待したい。アンケートの結果を見ると現場では本当に細かい問題に直面されていると感じる。現場との溝を埋める手段として推進方策というものが上手く設定できているか

どうかは吟味が必要。皆伐再造林による循環型林業を目指すという部分は、アンケートで指摘されているように、高価な林業機械で低コスト生産していくための事業地の確保や、これまでの収穫作業と異なるスキルをもった人材が必要。皆伐後の造林はお金にならないので、補助金頼みになる。これをどう回していくのかというビジネスモデル、働き方を新たに作らなければならず、全国的な問題。一方では、造林未済地のはげ山が非常に多く見られ、５年、10 年のうちに災害が起こるリスクは日本全体で非常に高まっていると思う。育林作業だけで生活していくのは非常に困難なため、かつてのように林業の他の仕事と組み合わせるなど、新たなライフスタイルを応援する方策もあっていいと思う。

委員

林業分野の方に質問。Ｊクレジットはどれくらい進んでいる？水産業にとっては、ブルーカーボンクレジットのハードルが高い。

事務局

県下でプロジェクトの登録が済んで販売まで進んでいる６件のうち、３件が市町。養父市、朝来市、宍粟市。Ｊクレジットに取り組むにはまとまった人工林があるところに限られるというハードルがある。県としても推進していきたいので、市町がもっている森林について働きかけをしている。まだ販売まで至っていないが、丹波市でも進みつつある。

委員

ブルーカーボンのことがビジョンには入っていないので、少しでもいいので入れていただきたい。

委員

今回のビジョンからは、産業としての農業だけでなく、農山村の生活の一部としての農業という視点が加わった。農政はその両方に目配せしないといけないようになってきているのが今の時代の難しいところ。農山漁村で住み続けていくための施策も必要な時代になっているという認識が大変重要。政策のターゲットになる人が誰になるのかという整理があってもよいと感じた。「２　賑わいのある農山漁村の創出」の（７）（８）がもう少し整理が必要と思う。（８）は「地域資源を活かした農山漁村ビジネスの創出」とあるが、実態としては「ビジネスを活かした地域資源管理」の方が課題には対応しているように思う。ビジネス的な手法を取り入れながらどうやって資源管理をしていくかが喫緊の課題になっている。また、基本方針が３つ書かれているが、もっとメリハリがあってもいいと思った。「１　持続可能な農林水産業の実現」は「持続可能」とするより、もっと「儲かる農林水産業にしよう」というメッセージが伝わった方がよい。「３県民とともに育む豊かな食・暮らしの充実」は暮らしを入れるとぼんやりするので、「豊かな食をつくっていく」ということがもっと前面に出てもいいと思う。内容はこれでいいと思うので、メリハリをつけて県民に伝える点に改善課題があると思った。

委員
　地球温暖化でコメの品質が悪い。私もキヌヒカリを作っているが、量も質もここ数年で最も悪かった。農林水産省の作況指数と現場にはかなり乖離があり、精米するとかなり量が減ってしまう実感がある。県の新品種はキヌヒカリの代替品種としてＪＡグループと県が共同で開発した。２月には名称、ロゴをプレス発表させていただく。食味もキヌヒカリ以上で高温耐性があるので、ぜひここにいるみなさまにも食べていただき、リピーターになっていただきたい。３年後にはヒノヒカリの代替品種が出るので、よろしくお願いしたい。23 ページ、めざす姿に「ひょうご五国」という言葉が出てきた。推進項目の（１）にも「地域の特色・立地を活かした」という言葉も出てきている。皆川委員が言われたとおり、淡路のタマネギや丹波黒大豆、但馬牛や日本農業遺産のようなものは数値目標などを出した方が、兵庫らしさが出てくると思う。今後とも県と一体になって頑張りたい。

委員
　基本法改正で重視されている食料安全保障について、本ビジョンには盛り込まれているが、分野横断的なものなので施策体系の表のところには出てきていない。それに代わるようなかたちで、「持続可能な農林水産業」など「持続可能性（サスティナブル）」という言葉が目立っているのが、農林水産ビジョン 2035 の特徴的な部分だと思う。
　他の委員が言われたように、経済面（利益確保）の持続可能性の部分と、環境面・（地域）社会面の持続可能性の部分をはっきり分けた方がいいと思うが、いずれにせよ「持続可能性（サスティナブル）」という言葉を、めざす姿の「次代につなぐ環境と調和のとれたひょうご五国の農林水産業・農山漁村の実現」のところに意識して入れて、本ビジョンの特徴を強調したらどうだろうか？
　また、オーガニックビレッジが日本一であるなど、有機農業の普及が、他の委員も言われたように兵庫県の特徴だと思うが、有機農業が環境創造型農業の中に隠れているので、特徴（兵庫県らしさ）として、もう少し目立つようにした方がいいのではと思った。
　さらに施策体系の後半を見ると、県民とのつながりや支え合うという言葉が多く出てくる。そのように競争よりも連帯、助け合いが強調されているのも特徴のように思えるので、同じくめざす姿のところに、「地域の農業者と消費者、住民が支え合う」というような説明が、入れられたらいいと感じた。

委員
　「県民への安定的な食料供給」というところ、県民にも経済格差があるため、フードバンクや子ども食堂といったものが安定供給に盛り込まれるべきと感じた。特に SDGs では、貧困の撲滅と不平等の解消がもりこまれているので、非常に重要ではないかと思う。水産では栄養塩、リンや窒素の投入量の視点が非常に重要。林業では危険な作業を伴う中で、対価が見合っていないと若い人も来ないという点が重要なご指摘と思う。ため池が日本一多い兵庫県では用水管理を効率化していくことやパイプライン化なども貴重な意見をいただいた。情勢変化としては資材の高騰に見合うだけの価格になっているのか、これからよく考え

ていかないといけない。他の委員の話で農業と農山漁村が出てきたが、さらにもう一つあると思う。これから高齢化する中で、退職された方の労力をどう使っていくかという視点も重要だと思う。17 ページ「ビジョン見直しの視点」の「5 地域コミュニティの維持・発展」において、地域マネジメントアドバイザーや農村コーディネーターの力を活用しながら、棚田などの水田を守ってもらうことも必要なのでは。産業政策、地域政策と併せて協同組合的に連携して地域を守り、豊かな生活を行うことも可能かと思う。企画部会でも検討してほしい。